■ 社名の由来

当社は明治12年（1879）に，創業時の社名「有史閣」を「有斐閣」と改めました。創業者・江草斧太郎の郷里（武蔵国忍（おし））の旧師・嵩（かさみ）古香の助言によるとされています。師は，中国のいわゆる四書の一つ『大学』の中の一節を引かれ，「衛の武公という大徳の君子があった。その人は川のほとりの竹林が猗々として緑色滴るばかりに美しく盛んなるように，此の君の徳もまた盛んであって，まことに斐（あや）ある君子であったが故に，子々孫々に至るともこの徳を忘るべからずとある。それというのも武公は実に努力の人であって，切瑳琢磨よく学問の徳日々に進まれた。『如レ切如レ瑳者道レ学也。如レ琢如レ磨者自脩也』とする。『有二斐君子一』とよばれるように，学者と一心同体になって努力精進されるとよいと思う」と，斧太郎を諭されたといわれています。『埼玉県人物誌』によれば，古香師は真宗大谷派了善寺の第十世住職で漢詩家としても知られ，温厚にして人格高潔，辺幅を飾ることなく，学問に精励した人物であったと記されています。今に伝わる〈有斐閣〉の扁額（口絵）は，古香師の揮毫によるもので，師から二代目店主重忠に贈られたものです。

■ マークの由来

当社は大正8年（1919）に社のマーク（社章）を制定しました。その由来は，正義と公平を象徴する「剣と秤」を月桂樹の円内に配し，創業の年にあたる「1877」の数字を挿入したものです。これは，大正8年9月に出版された泉二新熊著『改正刑法大要』に初めて使用されました。現在のマークは，昭和22年（1947）に創業70周年を迎えるにあたって，社内からデザインを募集し，新たに制定したものです。獣の王といわれる獅子と，鳥の王といわれる鷲を題材にしたもので，それは，社会科学から，やがては人文科学と自然科学の両分野における最高の権威ある書物を出版の目標にしよう，といった意味が含まれています。さらに，獅子には赤色，鷲には青色を配し，それは動脈と静脈をあらわしており，静かな中にも動的なもの，動的な中にも静かなもの，両者の融合と活動によって生々脈々の発展を意図したものでもあります。

（『有斐閣百年史』より）